

## 今月の断酒表彰

☆ I ・ Y さん 南千里支部 断酒一年

断酒表彰おめでとうございます。

ますますのご活躍を期待いたします。



令和元年 7月 1日発行 No.197

編集・発行 事務局・広報部

<http://suitashi-danshukai.net>

## 【今月の「指針と規範」】

断酒会規範八

断酒会は酒害相談はもとより、啓発活動を通して社会に貢献する

断酒会員の誠意ある説得で断酒会につながり、現在、「断酒幸福」を自らの手にした人は数え切れない。

われわれは断酒できた喜びを断酒会に感謝すると同時に、時間と労力をいささかも惜しむことなく、われわれのために誠意の限りをつくした先輩会員に心から感謝している。そして、そうした人間愛に充ちた行動が一部の会員に限らず、断酒会員全員の使命であり、断酒会の伝統であることを知った。

会員同士の一体感が自らの断酒を可能にし、断酒会を支える最大の力になっていることも知った。また、その一体感が会員だけに限らず、広く酒害者同士にもあるべきものだとして理解し、現在、積極的に酒害相談活動に取り組むようになった。

従って、断酒会は自らの断酒のみならず、酒で苦しんでいる地域の酒害者のために何をすべきかを常に考え、積極的に援助活動をする組織である。援助活動の大半は酒害相談であり、われわれの義務といえるものである。

またわれわれの活動は、酒害相談活動に止どまるものではない。

近年、アルコール依存症に対する社会の関心が高まり、われわれ断酒会員の役割は、酒害者だけが対象ではない時期になっている。

断酒会は元来、酒害者が自らの意思によって酒を断つ組織である、という認識で現在まで成長してきたが、もう一步踏み込んで考えると、断酒会は酒害者の最後のひとりも残さないという大目的を持つ組織であり、それは断酒会を必要としない社会をつくることでもある。

そうした悲願を達成するためには、酒害相談のみならず広く社会に向って酒害の怖ろしさを伝え、酒害者をつくらないための酒害啓発活動を行う必要がある。酒害の知識のない人、誤った知識を持っている人たちを啓発することで、過去、社会に何の貢献もできなかったわれわれが、社会に貢献し、社会にとっても必要な人間になることができる。

断酒会は廃酒思想を持っていない。社会に酒のあることを容認しながら、自らの酒を否定する組織として発足したために社会に受け入れられた。断酒会は会員が姓名を名乗るという原則を持つことによって、個々の存在が知られ、地域の多くの酒害者の断酒を可能にした。断酒会活動の最後にあるものは、酒害者をつくらないための啓発活動である。

## 断酒に思う (99)

5枚のカード

吹田支部 A ・ D

アルコール治療を決心したのは、自分からではない。11年前、朝起きた時に枕元に5枚の紙が置いてあった。その紙は、妻が書いたもので、他の紙の内容は忘れてしまったが、3枚だけは覚えている。

1枚は、「1人で子育てをしているみたいだ」ともう1枚は、「相談したいことがあっても酔っていない時がない」そして最後の1枚が「もう離婚してください」というメッセージだった。

その頃の私は、精神神経科に毎週受診してベンゾジアゼピン系の「デパス」と「ロヒプノール」の薬をもらっていた。お薬手帳には、アルコールは控えて下さいという注意書きがあった。

しかし、毎日仕事が終わると家に帰る前から日本酒を3合飲み、家に帰ってから夕飯を食べながらまた飲む。飲む量は決めていない。眠くなるまで飲む。最後に枕元に寝酒を準備して、睡眠導入剤ロヒプノールを水代わりに酒で流し込む。そんな毎日だった。

土日は、近くの市民農園で水やりに行くと言って隠してあった酒を朝5時頃から飲む。飲みながら、雑草を刈ったり、虫が野菜についていないか見る。仕事さえやっていたら、何の問題もないと思っていた。

飲み方が異常であるとは思っていなかった。たまに出る動悸におびえ、精神薬を服用するようになっていたが、アルコールに問題があるとは思っていなかった。ある日、妻が精神神経科と一緒に行くと言う。診察してもらい説明を受けて、最後に妻が「アルコールの治療はないんですか？」と聞いた。先生は、ここではありませんが紹介状なら書きますよと言われ、病院のリストと紹介状を渡された。

それから1ヵ月、まだ紹介状の病院へ予約もせず。精神神経科へ毎週通う日々。その結果、朝の5枚の紙だった。

私は、あわてて会社を休み病院リストの近くの新阿武山クリニックに電話した。その頃、新患を取っていないとのことで高槻にある新阿武山病院へ電話したらすぐ見てもらえるとのことだった。

病院や断酒会に繋がるのが出来たのは、妻の5枚のカードであった。今では感謝している。



問題飲酒が始まっているのに、自分を適正飲酒者だと思っている人がいる。家族は悩んでいるのに当人は何の不安もない。そうした家庭に酒害の実体を伝えるのも断酒会の仕事である。

挫折が原因で一時的に酒を乱用している人を、われわれと同じ酒害者にしないため、酒害の正確な情報を与えることも断酒会の役目である。

適正飲酒ができていても、将来に不安を持っている人や家族がいる。そうした人たちの相談に乗り、転ばぬ先の杖になるのも断酒会の役割である。

まだ飲酒経験のない若者たちに酒害の怖ろしさを伝えるのも、反面教師としての断酒会員の役割である。学校教育だけでは本当の怖ろしさが充分理解されないと思うからである。

そうした幅広い活動がなされることによって、断酒会の存在価値が広く社会に浸透し、今後の断酒会活動をより容易にする。

(指針と規範 P87～P90)



## みんなの広場

### 映画『ドント・ウォーリー』の紹介



〈2018年、アメリカ、ガス・バン・サント監督、東京テアトル配給〉

#### 【あらすじ】

オレゴン州ポートランド。アルコールに頼りながら日々を過ごしているジョン・キャラハン（ホアキン・フェニックス）は、自動車事故に遭い一命を取り留めるが、胸から下が麻痺し、車いす生活を余儀なくされる。絶望と苛立ちの中、ますます酒に溺れ、周囲とぶつかる自暴自棄な毎日。だが幾つかのきっかけから自分を憐れむことを止め、過去から自由になる強さを得ていく彼は、持ち前の皮肉で辛辣なユーモアを発揮して不自由な手で風刺漫画を描き始める。人生を築き始めた彼のそばにはずっと、彼を好きでい続ける、かけがえのない人たちがいた……。2010年、59歳で世界した世界で一番皮肉屋な風刺漫画家の奇跡の実話。

過去と向き合いながら前に進んでいく人生、まさに「断酒新生」を髣髴とさせるストーリーであった。

思い出したくない過去も忘れられない悲劇も皮肉を込めたユーモアで新しい生き方をつかんでいく主人公。最後は交通事故の加害者を訪ねてその過失を許すことを伝える彼。人はそこまで強くなれるのかと感動したシーンの一コマです。

彼が生き続ける周囲には心を許し合える人たちがいた、仲間とともに歩いていく私たちの生き方を再確認させてくれた映画でもありました。

(広報部)

〈みんなの広場〉では会員家族のみなさんからの投稿を掲載していきます。

近況報告、趣味の披露、読書感想、映画・ビデオ鑑賞の印象、会へのご意見等々、発表形式は、散文、短歌、俳句、川柳、漫画、イラストなんでも結構です。奮って応募してください。

(広報部)